091891-000-1

特64-638

寄如件（百妖笑々）

中村狸遊（善平）／編・画

M18

DBO-0426

特64
638

○来年い來年いの口癖も久しきものにて今年も最早僅に相成申候諸御著述の内十二癖に一筆序文をとの御依頼小生も固より好で筆を執る癖を物數奇の癖有之候間早速何とかこじつけ可申候其好で筆を執る癖と物數奇の癖の爲に頃來い筆の針の山研の血の池日本繪入新聞といふ地獄に墜落いたゝ朝は例の朝眠坊の癖夜は宵張の癖の上に尚二三時間も夜鍋をせねゞならず其癖讀書の癖談話の癖音曲を聞く癖劇場を觀る癖等は止みがたく用と遊びとに逐はれて百忙千劇夫故只御草稿を一讀して能くも當今の人情世態を穿ちたるものゝなる狸遊

兄は明治年代の式亭三馬にこそ世の人若此書を讀み他の癖を見て吾癖を正しなば又是社會に有益の著述と云ふべしと僅ふ賛歎の辞を發せしのみ思ひと廻らして序文を作るの暇之なく折角の御依頼を背き候へ平生の交義を欠く道理よて甚恐入候得共此度の處へ御免を蒙りたく其替り第二編にへ屹度相認め可申候昨今の繁忙實ふ言語同斷決して例の懶癖よてへ無之候間不悪御許容願入候草々頓首

十八年十二月十五日

雨の家狸遊盟兄

侍右

宇田川文海

と先生の一書を其儘序文にかへて掲るとはいへ明治年代の式亭三馬にこそとは半馬に足らぬ疲馬の身にとり重荷に過たるお譽のお言葉顔もからだも汗には浸せど尚斃るゝまで此道を駈行余所目もふらず怠らざる時には先生の鞭と看客の御乘廻しによつて悪ひ癖も治ろと只管先生の鞭と看客の御乘廻し受けん事を口ふ泡して厨ふものは當時朝日新聞社の末肩續物掛りと都々逸を以て世を渡る新米の戯作者戯の重荷の島の内の

住人

中村狸遊

笑々奇妙件

面の皮千枚張にする人

ナ、醉ふたく。相樓らず御繁昌で。お手が鳴つて居やはね。ナニ。否な奴が舞込で來た。イヤ。ナニモ。そんなに。顔丈かめる事いらないのつゝ所が。古ひ借錢が少々と。新しい借錢が。四五度有はかりダ。ナニ。さて其外に。割烹亭の拂と。纏頭の立替が七八度もある。ハ〳〵〳〵。

ものかね。おついでの時持て來るいね。ナニよふマアそんね。面の皮の厚い事が。口へだしていわれるハ〳〵〳〵。御覽の通り。面の皮千枚張と來て。平氣の平的。新聞屋のいふ。鐵面皮とあつて。ちまつて。少々引剝られても。膨ひやせぬて。ナニ。そして今夜ハ。何しに來た。ハ〳〵〳〵。あれハ。驚く。何しに來たと。茶や〳〵出て來てまんざら英學の。稽古も出來まい。やつぱり酒を呑か。藝妓を聘すか。ナト。我慢して。娼妓を買ふのだ。ナニ今夜ハ。いそがしくて。お座敷がない。ナアル。お茶やの。お座敷がないと。呼びもの、出來ぬと。いふやつハ。前捌の通り文句だゞ。ぞふせ。大座敷へ。通れぬお客だ。座敷の明まで。臺所で澤山つ肴も別にいふてやるに及ぶぬ。引出しの火色昆布と、天井の鰌で。我儘しておけ。ナニ其酒ハ。二階へ持つて行くのだ。ナーニ。二階へ跡で。イ、ハサ。一寸息繼に

熱いのを一盃。アヽうめへ〳〵

○法律まげる人

法律ゐ正條かさものゝ。何等の所爲と雖も。罰する事を得ずだから。何でも法律の。透間を潜つてと。種々勘考して見ても。如此密になつてゝ。迚も〳〵。及びも附ぬ事だ。故定律令の時分にゝ。隨分洩漏が。有つたから。面白事が出來た。先米商條例抔が。麁漏の極點で。

にのつたから百圓の身元金を。米商會所へ納めたら。當日から立狐ゐ仲買だ。少し花奢に開業でもをれた。依頼人の十人や。

十五人ハ。出て來て米の三百俵ハ。買買が有る。十錢ばりとしてゝ。証據金の三百圓ハ預かる。北所で賣も。買も。ヒン飲て置て夜敗色に二十錢も。高下もれば損ハ數切。益ハ。利斗り取て。証據金ハ。置據で商ゐ掛なら。實に狂言か打よい。万一米が片張にあつて。賣とか。買とか。一方になつた時客が損だ。唐へ悪皆攫取客が益へだ。何どう歟と。文何を附て。証據金ハ證文よして。益だけ渡れが。縁の山。大体ハ元も利もムヤヤリチヤヤ。彼是言だ。身代限を渡す分の事で。實にやらずアッたくりとハ。此事ダ。一文ゐしから。千

や二千い。河童の屁だつさが。條例が改正なつて。嚴の上ふも。身元金千圓以上にい。恐れる。千圓以上の金を入れて。米商する馬鹿が有るものか。偶あつた所が。喰合や。飲事が出來なけれむ。仕方がない。すきむ直お告發には恐れる又。玉轉しも禁止されるし。現金店も。アヽ度々拘引られていつ計算お合ず。詐偽業も。法律を如何損抜けて。尋常貸借の賣掛代おしても。裁判官が詐偽と判定するおい困るテ。約定違約で証據金投收も迂濶と欺さる人がなし。さり迚今更道德だの。品行だのと。正直になつて見ても。資本金の貸人いなし。川釣い川で果るといふから矢張之で耐忍らえやならぬ。盗ゝ得たるを王といひ。盗ゝ得ざるを賊といふて。豐公も。松下の鎧代の防盗犯。醫翔から有守盗だ。堪竟天下を掌握から。豪傑の所業といふのだ。此上は法律の透間がないから。ヘシ出て行より道いない。所で一番新發明ゑ。本屋の居

る近所で。相應お店を附貸でも借り。本屋仲間に加入して。何でも大部の書物の。群書類聚の。禮義類典か。但い康熙字典おの。豫約出版とやらかして。豫約金の三四千圓も詐僞して。跡は身代限りとするか。名義人を遁亡さすか。遁亡よりい旅行屆をして。東京へでも。三五年やつて道〳〵事に去よう。イヤ〳〵仝じするなら。一切經の豫約として。二三万圓も取込ひべしダ

○三百代言人

是い〳〵。石部金吉君。よい所で拜顔ゑやした。只今御尊宅へ。同ふ所サ。ナニ貴殿も弊宅へ。御慣臨とか。ハ〳〵〳〵夫い丁度幸ひ所で。お出合申しさ。時よ今日御來臨い。定めて。過日御依頼の。養女取戻し。勸解出訴延引の。御督責ならん。ナニ。左樣でゑ。イヤ。左樣でござらう。決して。等閑にいたさぬ。實は過日來。去金滿家の。家督爭ひ控訴事件で。事務多端ゑる。繁雜の所

へ。東京の友人。大井憲太郎。沼守一の両氏がパツナード氏同伴で。來阪をやして。大阪組合代言人。の改正するとか。品行上の改良するとか種々迂生方へ。協議があるので。ツイ尊家へが。延引をやした。ナニ。先生へ未御免許わならぬと。承つて居る。成程。如何にも免許へ。下かつておざらぬ。イナ。下かつてござらぬのでもない。下げてもらはぬのでござる。既に只今も。御詰申た通り。一寸変際する者が。大井憲太郎と。沼守一。法律博士のパツナードといふ者だから。何時志願の試驗を受

ても。忽地級第へ。論を俟ず。で別わ。詩も。碁も。子細へないのサ。其子細のあい者がなぜ無免許で居るかと。お疑ひだらうが。夫が今いふ。改良の原素で。全体大阪の組合代言人に。人物でないから。免角不品行の。誹を免れず。やゝもそもそ。法律を左右するとか。又へ不當の。謝義をとるとか。種々其説の。よろくないのが前いふ三氏と。迂生の持論さ。時に肝心の。義女取戻し一件を忘れて居やしあ。ナニ。其麗へ。免許代言人の。小濱爲治郎氏へ。依頼いたした。ハヽヽこれはけしからぬ。アノ人物杯と。始終迂生方へ。相談に來やすが。中々尊家の事件杯の手ま合ふ人物でさぬ。ナニ。噂をすれば影とやら。小濱爲治郎氏が。後ま來て居ると。ホイ。まをは。生昨日ぬ御出頭前。参館い

たして種々御教諭恐縮千萬。實に先生の御鑒定に違はず。美事迂生が。敗訴でござつた。ナニ（僕が君の所へ。いつ相談往さ。ヘイアノ。夫とチ、。夫く。家内ごの痴氣の急病を。忘れて居た。いつと、くそんくめん　さんどうぶたれ後刻雪館へ參堂旁く。其節わくわしく。失敬御免く

○海山を測る人

地學を。研究して。地理を。考察して見ると。天地開闢の際に。平地にして。凸も凹もなかつさに。相違はあい。畢竟。火脈の脈力に依りて。如此なつさのだから。印度の喜馬拉峯と。亞米利加の安得山と。太平海へ。埋込だら。亞細亞と。亞米利加。大陸になつて。鉄道か。敷かれて。汽車で通行が出來る

お疑ひないが。これは。餘り大事業だから。容易わ

と。出來ないが。先差當り。日本國内で大利益を興すには。近江の琵琶湖と。駿河の富士山と。

同夜に。出來たといふ事だから。全く。地球内部の火脈が。破裂して。駿河へ。噴出したから。其突出した丈が。近江わ地が蹈入て。湖わ成さとすれば。富士山の高さが。千三百丈餘なれば。琵琶湖の深さも。同等ゑ相違ない。これを政府わ建言して。該凸凹を。平均すれば。耕地を。得る事。莫大にて。隨つて利益も。廣大かい。いふ迄もあい。併し。富士の半腹に。

寶永山が。後に出來さと。見れだ。これだけ差引。瘤ゐある。これい遠江の。今切が。出來た際ゐ。窪だといふ事だから。こをを其處へ埋れた。以前の通り。濱名の湖と。遠江洋と。別にある。これも幾分か。國益ダ。夫いィ、として。湖水の竹生嶋い。如何ある知んて。此土を運轉すること。豫て窮理をして置た。不富の項上の。凹所へ。火藥を入れて。人穴から。道火をさけとすれた。造作もあく轉覆るそして。土砂い。輕氣球の。風船に積入て。虛空を運送して。琵琶湖の正上から。打明るとい。我ゐから感服し為發明だが。一得あれた。一失ありで。さうあると。琵琶湖疏氷が。畵餅ゐ屬するから。又滋賀縣が。不平を鳴らしただろう

○後れて居る人

モシ。進藏樣。サウ早足では。一緒ゐ往く事か。出來あくて。困り入るテ。一寸お待あさい。爰ゐ揭てある。看板の字の。傍訓にエス

キヨウシヨジヤクと。有のは何の事です。ナニ。エス教といい耶蘇教ソノ。耶蘇教が。判りませぬ。ハア、切支丹だ。ヤア、大變々々。其樣な。魔法の書籍を賣られて為まる物い。夫でなくても。近來い牛肉を喰へ人が。多いのでの神國の神々い。高天原へお歸りよなつて。伊勢太神宮をはじめ。八百万神が。お在でない。夫故虎狼痢が。毎年々々。流行するのだ。何でも天子樣ハ。平安城といつて。桓武天皇が。末世末代迄の都と。お確定なすつてある。京都へ還幸あそつて。政事ハ將軍家へ。

お委任なされ。華族とか。何とか。異名を稱ずに。お大名と。申樣に。せねど迚も世れ中が。治まる筈はおざらぬて。私も據なく。頃流行の。蝙蝠傘を。勸められて。指て見たら。氣の工合か知らぬが。絹の目から。日の氣が洩れて。髯の油が。沸てんけなん。其上に。結構な。井戸から。幾等汲でも錢の入らない冷こい水が有るのに。凍水を飲むから。段々躰が弱くなつて。いけない。アヽモシ。進藏さんサウ早足でい困る。ナニ心急ざから腕車ゐ乘ると。其人力が贅だ。造物主が。歩行くために。足といふものを。下すつてあるのゐ。若い骸持つた。貴公方が。老年の眞似をして。目鏡をかけたり。首卷をしたりして。アヽモシ。腕車はお止なさん。少し走れば直ゐ行ゐ。ヱヽ強情な。到底車ゐ乘つてしまつ。アヽモウ走つて。見へなくなつさホイ。こいつは大分。後れさ哩

○進んで居る人

頑五貫さん。舊平さん。貴公方と違つて。拙者なんぞい。人ゐ後るゝが。大嫌いだから。攘夷々々と。言つた時分から。鎖港ゐぞとい。到底出來ない事と。頻りに反對論を。首唱したりで。官の嫌忌を受けた位。其後御一新になつて。恐乍ら天皇陛下が。万機の知食さるゝと云

ふ事あるら。町人風情の。拙者ゲ。雇人を使用てい。濟ないと。手代も丁稚も。殘らず暇をやつて。掛屋敷も。本宅も。活却しまつて。三間々口の。借屋へ這入て。上町乃明地面を。借つて。養豚を始めて。瞬く間ゑ。三千圓斗り。利益を得ましたこうらよい見切り時と悪皆賣つてしまうと。サア死出しゑ〳〵養豚で利を占た者い。先大阪で。拙者一人。夫から後い何にもせずゑ。居ましたが。太政官の楮幣が下落して。札百両ゲ。正金六拾両と。あつたらら。在金殘らず。楮幣ゑ引換てしまうと。札の方が上直ゑおつて。しまつたので。此度い其楮幣で。古金を買つて置と造幣局ゲ出來て。古金が直上げと來て。鋸ゑ儲ける彼是して居ると。征韓論ら。西郷隆盛が辭職して。國へ皈つたと。聞あから。這奴此儘で。果る人物でおいと。事情を探る旁。薩州へ公然。眞宗が許可ゑあつたを。目的ゑ佛檀を仕入て。積で行て。相當の利を得て。剩。西郷の動靜が。どふも變だと見たこうら。大阪へ歸つて考へて居ると。私學校の一件サ。案の條是だから。彌兵端を開くと見て直ゑ伊賀大和へ。飛出して梅干を買入たと。もく〳〵。小口らら約定金を打て廻ると。官軍操出しとおりて。藤田組大倉組が。梅干と買出しら乃で。三層倍五層倍の直上で約定斗で。利附した買人が。奪取勝ツイ五六千圓利益を得て是こうらが。彌〻貿易でなければ。大業があせおいと。見たから上海お出店として引續て章動巴理ゑも。支店を開く目的。此度琵琶湖。疏水が決定したから。乘ゑ抽でこの。明地面を借りて。鶏を飼ふ心組だが。どふで考よう。何と諸君ゑは解せますまい。如此先へ〳〵と進まなけゑや。大利い得

られませぬ。何となれど。雄鶏の安價のを。數力羽飼ひて。鶏を損料で貸す積り。夫と云ふは。加茂川で。船遊びが出來る樣なおると。京都人物は、船は馴ないから。稍ともすると。水へ溺れて。土左的となる。人が多いは。鏡に懸て見るが如し。サさうなると。

京都人物は。水練に不熟だから。死骸を探さに。困るはしれた。事それ

其時には。牡鶏を船に乗て行と。死骸の上で。報刻を諷ふは。誰でも知て居るから。ソヲ〻牡鶏が入用。其牡鶏を損料で。貸とはどうでいはナ

○買物で天窓とる人

負て置ふさい〳〵。今度始て買のでいおし。併も。此椅子二拾挺。求めるのざから。八拾錢の物品を。六十錢にする位は。當然ダ。ナニ昨年納めさのは。九十五錢ダ。それ見なさい。諸物價次第に下落の時節。クヅ〳〵して賣損じて。見なさい。亦々五十錢で無ければ。買人がおくなるはお。前の掛りの者と。直切あいといひなさるろ。尤從前の。用度係の者は。勿論眞お。社の爲能を。思つた者は。一人もおいから。言直で。買つさろう。

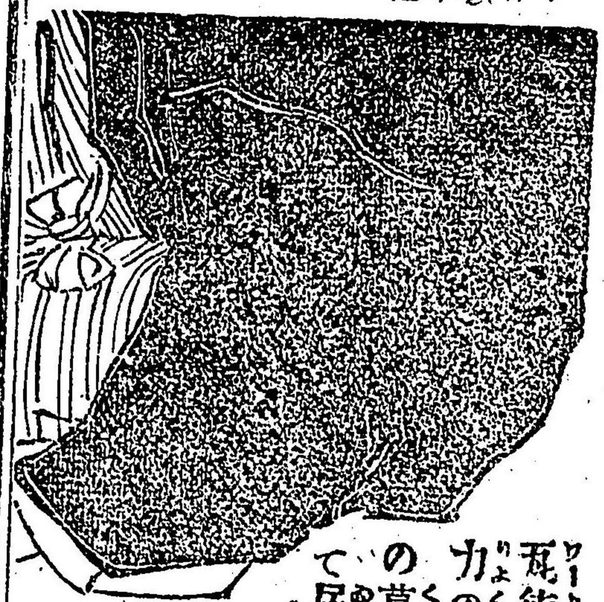
僕ゞ迚自分の。腹が痛むでおし。直切あくも。何ともないが。今度社長の鑑定で。登屋されさ。用度係り乃僕たから。悪まれても。厭くない。買物い安く買つて。當年の計算でい消費の八百圓も。減額せないと。役前が立あいからサ。仕方がない。六十五錢と張込う。ム、。まけるこの。さうおくてい叫いぬ所サ。其代り。以來い外で買いあい。貴公の店で。買事ゐ極るて。拾三圓。ソレ神功皇后の札で渡す。銅貨ゑ換て拂へい。幾等こう

打歩が取れるのだゞれど。ア、コレ〳〵。受取い。拾四圓として。一ッ七十錢。と。書て貰ふのサ。此後も僕か來あい時い。認印を押捺て。書附を持して出したら。いつでも此例て。二割方斗い。高く仕切書をして。餘金い預かつて。置て下さい。併し是ゝ、他の者へ穩密ゐして下さい、會社の。用度課何ぞい薄給だから。役德がおゞねば。粥り湯も啜れな

い。ナニ。先役も此通りしたとか。ぬからぬ奴ダ。ナニ一割より取らなかつた。ヱヽ。慾の少ない奴ダ。一寸きるも二寸切るもといふ事を。知らぬ奴ダハヽヽヽ

○鎗栗お追れる人

ヤレヤレ。腹乃急がしい事〳〵此機械の運轉の。



瓦徳氏が。再來るとも。蒸氣力の。迚も及ばざる所ダ。去年の暮に。猶今回の。瓦解と思つて居たのを。一牛懸命。非凡の英斷で。アノ。八増銀行の。支配人の。塚見を。欺くらかして。衾で貫つて。不渡承知の。コルレスポンス。

を組で三百圓融通した。尻を。一月四日から車で飛歩行て。東京の手形が。戻るまでに。都合してからと。言ふものゝ尋常の事でゝ。凌げあいのて。金皮の時計を。六十日延で。五ツも買ゾて。現金で賣飛した尻が。亦々來たのて。鎗屋町の。預け金を

一寸と四五日と。雜句に二錢日歩で。借込んざのゝ。三十日も立もんだから。催促のきびしひ筈ざ。

う去ようかと思案中へ。栗野から持つて來さ。鰹節の

仕切金五百圓を。荷主へ二百圓渡して。殘りの出帆の節と。胡麻かして遣たが。今日船を浮ると言われたよゝ如何ゐ亡もがつくりしたが。無理よすゝめて。今日ゝ久しに供さして。住吉祭りをさしたが。明日までに。何か知惠を。絞り出さゐいと。造幣局の。煙筒に。煙り立ゐいッ

○無限飲込む人

是が。此間お噂の。彼滑稽本の。原稿でゝか。成程閨房自在法十アル。刑法治罪法と。閨中の事よ飜案とゝ。面白い。之ハ弊舗で負擔して出版しまそから。夕刻御實印御携帶で。御光來下さい。出版屆に御調印を。願つて。明朝本署へ。序か有まゝから直に出します。併し。先生のお名前を。まだ人が知りませぬから。一番法律に依つた。滑稽書ゞから。土井通夫君に。題辭を願ひませう。定て御存で玄よう。蟹の畫で有名な。控訴院の。前の所長鉄鴎居士又繊物語も。弊舗で雜誌に致ゝ事ゐ。決めましたが。口畫ハ國松先生ゐ。依頼事に致しましたが。其事に附。少々入用でございまゝもゑアノ貴社の新紙ゐ。御掲載の。圖畫の。木板の。第三回と。五十回と二枚だけ。後刻小僕に。戴きにゐげまそから。お渡しを願ひまそ　其代りに〻先達て。御遣しの彌治喜多地獄道中。

滝頭毛い東京の曾文に。序を書しにやりましたのら恭り次第こゝ直ぐ木板に掛、りまそ。夫この

ら弁破

列翁獨占闘い。版權になつて居まそから。賣るゝい相違ない。が。出版條例に違背しまそで。華盛頓獨占と。題号を更て。發賣する心組て。早見先生ゝ。凡例を依頼して有りまゝ。ゝれも弊舗から。出版する事として。原書い早見へ出して有りまそ。何を御謝儀やら。原稿料い。製本にかゝり次第。直に献じまそ

○官員風吹かす人

「クヤ〳〵お偉。何チウカ。轉鶏い姿が知れない。姿が知れ無い。チウ事が。有もんか。弱々姿が知れないなら。特務巡査へ。申し付て探偵をるから。ナニ姿が知れぬとて。他所行した事だ。ナニ他所行したと言つても。管轄地乃内ならば。其筋ろっ調査それバ。直に知をるナニ。築地だらう。築地おら急度誰か客と曖昧した事と。して居るにゝ相違ゐい。淫賣規則ゝ照準して苦使にしてやる併轉鶏に於てい。已共へ確乎たる。書紙も取つて有のらゝ已共より外ゝ。客ゝ取ら無い筈だが。全く其客人が。無理ゝ築地へ伴て往つたゝ。相違無い素より有心故造で。娼妓でも無い。藝妓を伴て。旅人宿へ止るとい。怪しい奴だ。是から先へ。取調べて。やら

ねばかるやいから。憲兵へ通知をる。万一轉鶏が諾と言つた事ち
ら。急度姦淫と。しかけのそよい。相違無いから撿事へ告發して。處
分をる樣よ。裁判所長へ談じると。去よう。ナニ。何ナウか其樣
客が無い。汝はで其客乃。辨護をすると。以前し身分なら。首級打
放す處だが。廢刀乃世ざから。致し方が無い。宥してくれるが。達
て隱し立すると。鎮臺
へ號令して。一大隊滝
出し。攻擊をるから。
ナニ轉鶏に限つて。怪
しい事い無い。己共も
ソウ認定して居るが。
出て來おけれど已共
い飯る。ナニモウ十二

時たから。泊まれナウか。己
等ち時計も。十二時たが。今
何處かの。學校い。十一時打たで
おいか。ナニ。あれい花街。近傍乃
學校い。後れて打つウカ。これい
不埒千万ざ。早速戸長を。明日呼出して。嚴重よ呵責してやる。
夫よ奥乃座敷乃客い。アレハ。何ナウ者だ。已等乃意も去程ず
よ。面白そうよ噪ぎ居るい。十二時打て。大分ある。三味線を
彈ー居るい。違式を犯ち居る。派出所乃巡査よ通知するぞ。ソ
リヤ。〳〵。誰ーすを呼べ。〳〵

○日和見て居る人

今日の織田屋の。跡式一件の裁判ち。何方が勝訴になるか。聞

たひもんだと。順慶町から。故意〳〵傍聽に往くのも。深ひ思案が有つて乃事ダ。豐島屋富吉が。敗訴におろうが。明地屋光藏が。曲者にならうがいそんな事に。已等ハ構はねへ。何でも一番。纐色のイ、方へ。喰付て。胡麻を摺つて。出入をさして貰つて。大和一圓の。得意は己の方へ。預る事よせねバ。ならぬと思つかたらサ。何でも今の時節じや。此眼光が。見込なんでハ。逆も人にはおれあい。明光もさる奴ダ。貧乏の底あハ。髭早洗ひで。した人間が。織田屋の御蔭で。丹波へ出店も出來たのに。本家ぶつ倒して。横領するのは。强氣ダ。豐富も下男から、登庸。今度長州屋の。裁判を和解の。願下してかへつた手段にハ。恐れ入るナ。判決におつてから。胡麿摺に行も餘りだから。撲樣が早く去れ、ばよいに。慶應四年の正月も。此流儀で仕遂げて。今

に花々しく。やつて居ふやからも多くあるから。何でも己等も。日和のイ、方に。目をつけねばならぬテ

○金貨の番する人

火の廻り〳〵。火の用心〳〵。今夜ハ近星では有り。犬は吼るし。氣味の惡ひ晩でハある。銀行へ預けて置うと。思ふけれど銀行も。ア、身代限りをしては。迂濶ゐは銀行へも。預けられあい。公債証書を。買ふて置うと。思ふあれど。楮幣も公債証書ハ類燒でもして仕舞たら。灰にあつてしまうから。金貨か銀貨でも。買つて床ゼ下へ。壺に入れて埋めて。置うかと思ふ々れど。此前に二歩判の。國金で。戀々して居るから。是も出來ぞ。家屋を買へば。これも燒るも知れぞ。着物ハ常着一枚さへあれば。結構ダ。女房を貰へば。着せねばならぞ。さねばならぞ。

其上子が出來るも。知れねば。當分止て。麥飯を鹽で。喰つて。折々淫賣婦でも。買つて置けば濟むるだ。親類がなけれバ。交際はなし。貸した金には月々子を産し。殖る斗りだが。盜賊と出火が。氣にかゝつて。夜る寢られぬのには困るて。何でも急に轉居して。交番所の隣りの。憲兵合宿所の裏長屋かへ往かねばならぬ。仲夫も轉宅それバ。幾等か入費がかゝ、るから。巡査下宿でもしようろ。

さうすれバ幾等か。寄留賃が取れる。明日寄留貸の札をはる。るに去より。火の用心〳〵

○女に精神奪いるゝ人

ウン〳〵よし〳〵。

醫か。買が宜い。一本ちやア少ねへ。思入さして。天窓を能手の樣に。するが宜い。

ナニ。帶か。よし〳〵。帶ゝ道連。夜ゝお情とゝ有かてい。買べ！

サ。湯卷に下着。尙妙ナーニ赤ひのがイ、。唐紅の。燃立樣な間から。白い所を。見せびらかされちやア。宰予でなくつても畫寐たくなるワサ。ウン〳〵よし〳〵。芝居。承知。お花見よし。お夜

食い鰻魚か。夫もよし。春い何様でも。小遣のお金が。餘計に入る。ハテ。幾等でも出してとしサ。お袋の養か。月に十圓。所帶の失費ゲ。間に三十圓。税が三圓。衣裝が百圓。子の養ひと乳人の給金。此合計がざつと半百。ナニ又子が孕んだ。外の客の子でないと。ナニ。ソンナ餘計な。心配が居るものか。幾等あつても。あるだけ子寶。コシ外の客で。出來た子にしろ。己れの子といや。己れの子とし

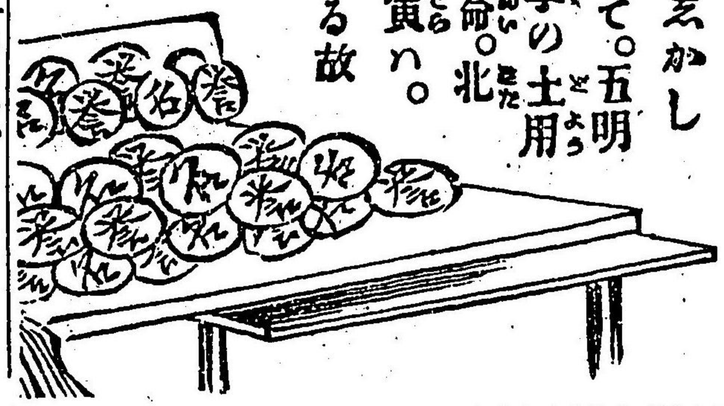
て。其養も出してやるのサ。ナニ。子が出來れば雜用も。餘計に入るとト。ハーテ。一人りや二人りの。雜用が殖へても。夫ヲ苦にする。事いないのサ十圓札なら。僅か四五枚百圓札なら。過金が出るゲロ。夫程の事苦にする事かサ。ウンウンよし〳〵。ナニ。涎ゲ襟に下がつて居るとか。ホイおいつぱかり。惡かつたケ

○御幣擔

コレお土。今日い徳川の何日にある。一寸吉凶早操の暦を出し

て。お金の嫁入の日を。見て置かよい。ナニ先方からいふて來た日ハ。冬の甲子にあさゝ至極よい日じやと。夫が大違ひ。成程冬の甲子ハ。天赦日になる故。一寸思ふと。そい日の樣ダが。其日ハ丁度。三林方に當て。聳取。嫁取。移居杯にハ。いゐつて。忌ひべき。大の惡日。先に用意の。調ぬ內。早く斷りと。いふて置がよい。アヽコレ〳〵。夫も今夜と。東の方ゞふさがりになる故。明日朝早く。巽の方へ。一二三町。往て。夫うら眞北へ向ひて。斷わりに。行くのじやナニ今夜あらよ者れど。

翌日ハ。先が沉手者故。氣が張りて行憎ひおら。昨日丸龜屋で買ふた。秩父島の着物。仕立わやるといふのか。ムヽ夫おら。最一日延して。明後日の。卯日ゴ。仕立るがよい。えかしさうすると。又明後日の辰の日ハ。不成日にて。五明後日の巳の日が。八方塞り。其翌日おら。四季の土用で。東の方ハ。遊行金神。南の方ハ。お金の本命。北ハ。的殺。西ハ。暗劔。乾と巽ゲ。破軍八將。丑寅ハ。鬼門。未申ハ。歲破と。四方八方。塞がりになる故いつそ來月に。延す方がよかろ。イヤ〳〵來月にあると。そゐさも。私しゃ。同じ。星故。二人りとも中央に這入つて。八方塞り。又來月ハ木治郎と。水之助の塞。來年ハ



火之助がまとり年あり又來年ハお金。が厄年にある故。マア二三年。嫁入ハ延して堺の方除と。吾彦の觀音へ。厄難除に。參る方がよかろテ

○名譽賣る人

コレ久吉。まだ朝日新聞ハ。配達せぬか。來たら直に持て來い。よもや亂日ハ。此花の樣な不都合ハせまいと。思ツて居るが。已ハ一番。慈善家の名譽を。賣る心組だが。隱すよりハ。顯ハるゝはなしといふから。新發明で。新

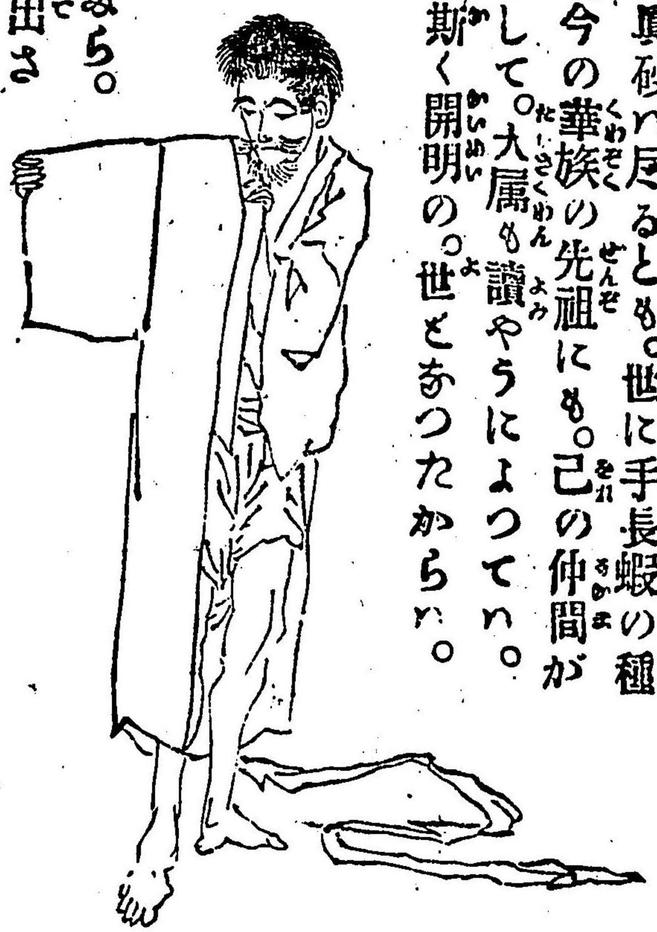
聞紙に。薄命者が。掲載あると。直ちに五拾錢救恤金を。出財する事に。決て。何區。何町。何丁目と。町名ハ判然記載て。苗字ハ故意と。何某として。所が。眼目ダ。當町で。慈善家といへば。己の事とて。三尺の童子も。知つて居るうら。性名を記さぬ方が。狂言が大きい。爰まで。慈善家の名を。賣るのと。余程の。骨折だ。夫に此花でと。何某と斗りで。町名なしで。雲摑む樣ざうら。己より外にハ。知れやをかい。昨日新聞配達した。川崎村の薄命者へ。五拾錢もたせてやつたから。此五拾錢ハ。己の分に。違ハおい。朝日へ一昨日持さしてやつた。高津新地の。盲の按摩の。濛死の仕損じたの。五拾錢ハ。町名判然として呉る筈ざが。此間探訪者を播半で。一盃飲して置たから。大丈夫の筈だ。日清騒件が。此樣に平和に。局を結ふ位なら。彌開戰ハ節ハ。千圓献上と。

虚言吐て置たらよかつたにアヽ遺憾な事だつさ

○赤ひ仕着れる人

石川や。濱の眞砂い尽るとも。世に手長蝦の種い尽まじと。今の華族の先祖にも。己の仲間があり。夫からして。大屬も讀やうによつてい。己の同類ダ。斯く開明の。世とあつたからい。

錄盗人あとい。些古めかしい。何か。新發明の盗方をやつゐら。専賊免許が。出さ



うなもんだ。風流あのい。花盗人罪の少ないのい。豆泥棒。智恵のないのが。詩歌。都々逸。雑報の種泥棒。浅草觀音の鶏を盗むと。面へ鍋炭を。塗られて奥山中を引廻され。田畑に作つて有るものを。盗むと。村外れで棒縛りの晒しもの。湯屋泥棒に。踏もの泥棒。巾着切にちよつくら持。致し逃に。摘喰ひ。鍋釜茶釜を引外せバ畫鳶と。迪し免たる。南北新地の壞磨を。盗めバ。好男子。お三子守の糠味噌を盗めバ。襤褸泥棒の黨與。多き中に。自己のい。熊坂長範宗。黄金。白銀。衣類。手道具。他の大骨を折つた物を。只取のだから。割ゞ宜やうだが。細かに勘定を立ると。一三十年前の相場なら。日に三夕にしか。當らぬといふ事其癖憲兵巡査に。生捕ると。年の往ぬ赤衿同様。此通り赤ひ仕着を着らるゝやつさ

○新聞學者

君も無功。青史を。勉強して夜道より。日を暮はよりい。新聞紙を。讀給へ。實に博識の捷經ダ。僕如きい。新聞紙の爲に。德を得るる。夥しく。亦新聞紙より。關係のるなれど。廣言を。吐やうだが。恐らく知らぬるい。更ゑおしさ。まづ吾曹といつば。日々新聞の。福地の變名。官員然とい。藝妓乎とか。書くるい。朝野の成島が。始り。我利々々隊者の。平茶目連い。毎夕

社の魯文が。文癖。讀賣い。日就社繪入い。両文社。續物の附錄が。京文社。錦繪の附錄が。時事新報。毎晩の配達い。今日新聞が元祖と。いふるから京阪の。各社なら。内外新報い大東の化物。日の出い。中外の分社。新聞の賣高い。朝日新聞。名のよく通つたのが。宇田川文海。此花の記者が。三品先生。畫公い。芳峰國松といふ事から。立憲の職工い。何人居る。神戸の又新い。一ケ月。何圓宛の損金が。立つ。此花い。朝日と。紙幅い同等ても。字數い何字。少ゐいといふ事と。朝日の繪にい。前髪の多ひのと。此花の續物にい。新三といふ名と閻の書い多い事

まで。知て居るのさ。又新聞紙の。効力に依りて。亞細亞が。二百九十三万八千五百三十方里。ある。支那の揚子江が。一千三百十四里。流る、事。歐羅己の人口が。二億六千五百万。居る事。亞米利加に人語が。四百二十三種。別る、事。亦「デームス」とい英吉利の。河の名。ノートルダム」とて。佛蘭西の寺の名「リスボン」とい。葡萄牙乃。都の名「シントヘレナ」い。一世那法烈翁が流罪とあり一所「バヒロン」い比耳西亞王よ。陷落せし。城の名。亦「スペンサ」い如何いふ語」。をいつた「ワット」い如何いふ。機械を。發明した「コロンビヤス」い。如何ある國を。發見した「華盛頓」と如何なる軍略を。施した「マクマナン」い如何なる攻戰をした「シールペー」と。如何なる軍艦を指揮した。又帝國大日本の。皇后宮い。和歌の。御名人。三條實美公い。書が。見事。勝

海舟先生、。髑髏の畫が妙手。大阪君は。蘭を能畫。團十郎は。釣が好。菊五郎は。茶と嗜み。宗十郎は。投機が得手物。有馬正純は辭世が麁歌。共同會社い。長門丸は。一時が出港。三菱商會の。廣島丸は。米國船の。ーンチーフユーユーク号と。横濱よて。接續せる。北陽の談判は小林が仲載。駿々堂の五書獨案内い。府外郵税が。廿四錢といふ事まで。暗誦じて居るのは。全たく「ニユス」あるもの。ありての故で。西洋各國よ於ては。國の開化と。不開化は。新聞紙の發賣多募よ。依りて照々乎たりと。いふ事サア、苦しい。餘り多舌て咽が乾く。茶を一盃下さい。後は次號サ。

○大根役者

「ナアモシ鯱六さん。お前さんも私も。名古屋產れで。故郷の

自慢を。するで。無が。藝人ハ尾劫に。限ゝと云ふハ。東京へ行ぬ。大坂役者も。名古屋迄ハ來るなり。東京からも。來るからハ。自然と兩方の宜い所を。摸範ゐるから。藝ハ達者になる。私ゐんども。前代の嵐三幸の。親方が。彼方へ來なさつた時の弟子になつて。幸の字を貰ゝ

て。嵐大幸と。名乘つてから二十年以來。東と箱館から。西ハ長崎迄。田拝に歩行て。見ましたが。如何云ふ者か。役廻りが懸くて。忠臣藏でハ。五段目の猪。仙臺萩でハ。御殿場の。鼠をして居る。ものゞから。幾等骨を折て。勤めて見ても。誰が扮て居るか。看客ゐ知れないから。眞の卿臥儲だ。松阪の芝居で師匠が時平で。菅原の車場の。牛の後脚を。勤めた時ゐ。何でも看客が。見てくれないくても。師匠に見て貰へゞ。宜しいから。新工夫をして。褒られりようと。思つて。牛ハ苦しい時にハ。小便をちびると。云ふから。手拭を水で温して。持て出て車を破られて。逃て這入る。節に。手拭ゐ絞つて。小便を垂る眞似としたが。見物ハ一寸分らず。漸く三日目に。師匠が見付つて。部屋へ這入ると。呼に來たので。定めて褒られるだらうと。思つたら。大相違でアリ

ヤ何だと。聞れたろら。如此々と云つたら。其樣な汚ならし い骨は折らぬがよいと。果は大笑さ。偶。宮島の芝居で。人間を勤して貰つたが。お前さんの。知つて居なさる通り。宮島は晝夜狂言が代つて。晝が忠臣藏で。六段目は輕乃母親。夜が白石噺で。興茂作乃女房で有つたが。興茂作の。死骸を見てから晝乃。山崎の。婆と取違つて。コレ〳〵、聟殿と。やつたので落が來て。見物い。ワア〳〵云出そ。漸う氣が付て。白石噺の臺詞に。直して見たが。見物の惡口が。

止まぬろら。後見の狂言方が。見兼て飛あさい。〳〵と。臺詞を飛ばせと。云つてくれるのを。何ダワア〳〵で。氣が逆上て居るものざから。舞臺からカブリ付の明た場へ飛たので。到底惣潰れで。幕を引て翌日から首落サ。夫でも小笠原島へ。買われて往つた時と私が。座頭で。外題い金門と。石川染と。釜ダ淵と合併で五右衛門を勤ましたが釜入の場で。小笠原島の人い。無言て見て居るが東京ろら來て居る。人と見へて。俠客ポイ男が。イヨー風呂吹と。云うから考へて見ると。大根ダ釜の中へ。這入て居るからだとサ

○腐儒者

富んとすれば。仁ならぎとい。よく言る語で。アノ大屋なる者

の苛酷なるよゝ驚くナ。僅々四ケ月の。家賃淹滞に。家屋を催そとゝ。嚴も亦嚴。實に痛歎の外あしダ。向の洗濯屋の。老婆の如く。日々出入をして。巧言令色をやらかしたら。宜しからうが。仮にも。堯舜孔孟の道を。修せる者が。誓つて。出來あい譯サ。夫に家守の慾兵衛さんが。死あつた當座に。家守を云たら知何だと。彼婆アが。云つて來たが。今で思へば。全く大屋の內命だつたか。知らんて。夫ゝ聞も。穢らしいと。井戸傍て。耳を洗つて居さら。奥の大工の錐造ダ。何をするゝと尋ねゝから。許由の故事に。倣つて居るといつたら。許由居士とゝ。誰の戒名だと。イヤハヤ。俗物にゝ恐れ入るテ。大聲俚耳に入らずで。無理もないが。該件を。謝絶してから。督責の嚴になつたのだ。迂生如さゝ。一邑を治むるの德ハ。確乎と全備して居るのだが。日本と東夷ざから。聖賢の道を。知らないので。野に遺賢ゆりで。如此所体ダ。嗚呼道行われぜ。授にのつて。海に浮まんだが。我に從ふ者ゝ。亟ばつかりたから。諺方がおい。然し。大聖孔子さへ。時に。會そで。生涯東西南北の人で。お消光おされた。迂生も寧。道の行はれんゝを斷念して。當長家の。春秋を作らうか。知らんさうしたなら。下屎代の。天窓打家守の。亂臣やら。繼母に野合て。舊財をせし

めに掛つて居る。二軒目の産婆の。養子の。賊子が。恐れて。名譽回復でも。訴へるでわらふ。嗚呼我を知るも春秋。我を罪するも春秋ダ。又顔子に倣つて。一瓢の飲。一簞の食とやらうか。諺に云。運ハ天にありといつば。役異端でいあるが。達摩に倣つて。九年面壁といふ樣ヨ。運の來るを待が。上分別か知らんて。夫で い尻が腐つて。所謂。腐儒輩と。見做さるゝも。遺憾ダ

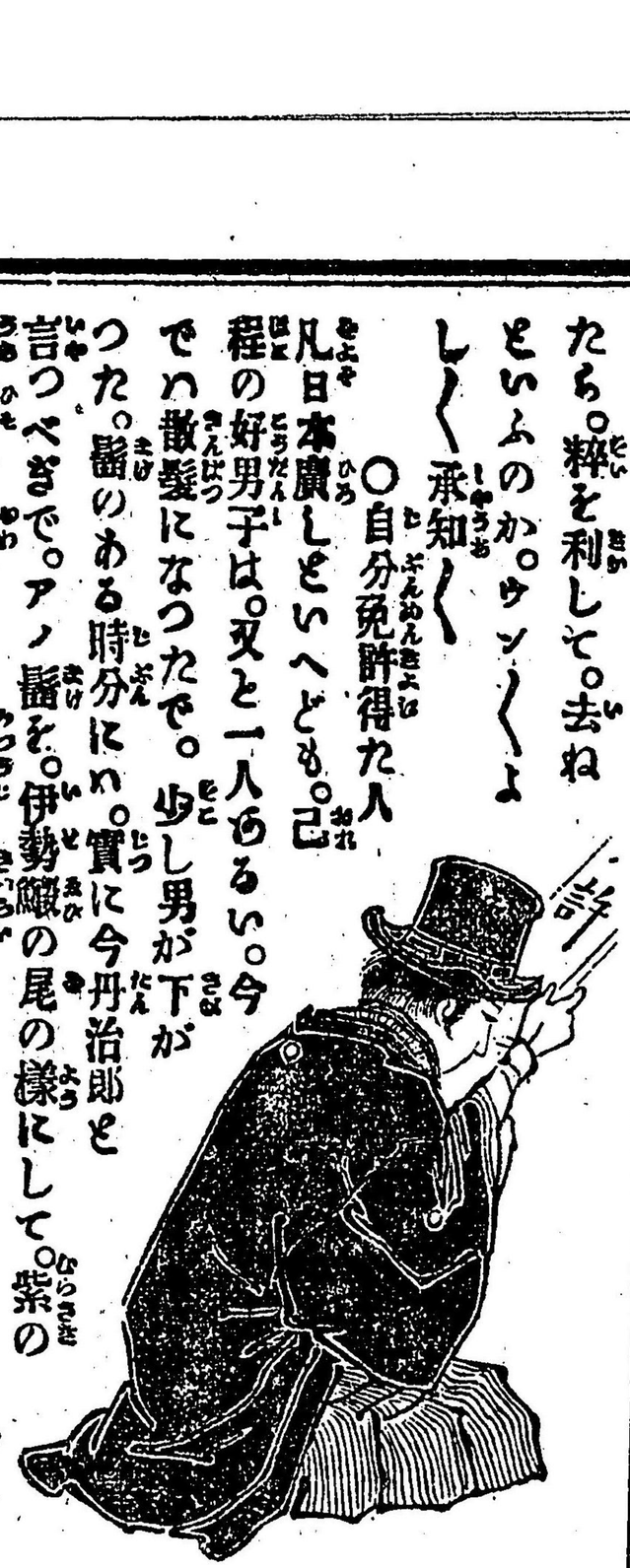
○鼻の下の長い人

コレ愚若吉何塞で居るのだ。ハヽン。分つた。折角芝居。見て居る所へ。貸ひにやつたによつて。夫で大方怒て居るのであらう。ナニモ。私しからやつたのじやあない。店から往たのしや。ナニ。そんなじやない。氣分が惡いと。さうか〳〵。そんなら是から車で。鶴村屋か。松村屋か。浦江邊へ往てい。どうしや。ナニ。うんなペイ〳〵藝妓の。行所へ否だ。ウンウンさうか。うんならあつうり。新屋敷の琴亭か。五番町の堤鯛か。いつそ相生町の。藥亭いどうじや、ナニ。夫も否。ブーン。夫ではコナッ。ウンある〳〵。今度千日の灰山へ出來た。南鏡圓。彼所い。何うじや。ナニアンナ骸骨の出る所より。ア ナヤンか。壽ナヤンを呼びにやつて。一所に面白う散財がしたいと。ウンウンさうか〳〵。夫なら早く。さういへばよい。ナニついでに。井上はん(遊所を廻る呉服商)と。銭市さん(同しく小間物や)を。呼びにやつて。夏の俗衣と。藍甲の櫛が。買ふてほしい。ウン〳〵よし〳〵。うなたのるなら。何でも承知ダ。ナニ壽ナヤか。ア ナヤンの來

たら。粋を利して。去ねといふのか。ウン〳〵よし〳〵承知〳〵

○自分免許得た人

凡日本廣しといへども。己程の好男子は。又と一人あるい。今でハ散髪になつたで。少し男が下がつた。鬚のある時分にハ。實に今丹治郎と言つべきで。アノ鬚を。伊勢鰻の尾の樣にして。紫の打紐で結ひたら、光氏の再來と。いふであろうれに。惜しい事には。米八や。仇吉の樣な。婦人にまだ。巡り會ない。其上万藝に達して。書ハ董其昌。其儘で。これが。支那に生れたら。適登庸も



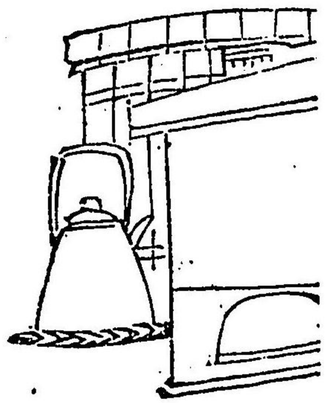
されるだろうに。日本人よと。眞に書の善惡を。見判る奴が。一人も無いと見える。夫ならこそ。看板一ッ依賴に。來る者が無い。畫ハ。巨勢金岡を倣つて。居るのざから。凡眼が屆かぬと見へて。讒謗斗りいふし。和歌ハ。万葉より以前の。千早振神代の往古の。八雲立と詠し給ひしを。據として居るのだから。俗耳に通じ兼るが。おれも感心してがおくて困るテ。又俗事にうはてハ。舞踊ハ東京で花柳壽輔が振を。一度見て。自發明する所があつて。一種特別の手を。工夫したのだから。大阪の山村あんぶの。遠く及ばぬ業で。淨るり清元ハ。犬の遠吼の如く。新内ハ鼻の穴の掃除。一中ハ禊參りの念佛。同樣と。聞破つて。義太夫と。加東と。外記と。折衷して。小野のお通直傳。眞ハ淨るり節とも。云つべき一派を。語り出しあのだから。當時聞せてやらう

と。思ふやつゝ。一人もない。まだしも。先代の清元延壽太夫か竹本長門太夫が生ていたらダ。基や將棋ゝ。古めかしいから。中將基を。さしおらつて。見たら。僅か一居間ゑ。上達。中將基に家元が。あつたら六段位の格ゞ。そんな事より。惜しいのゝ。最初にいつた。好男子の一件ダ。ふんな美男子ゑ對そるの佳人なく。空しく

生涯。獨身に居らしむゝ。ア、天公ゝ。是か。非か。己を見る事。己に如ずで。自分が證人ダから。偽うなしダ

○筆で飯喰ふ人

コレお墨。貸本屋の梅村へ。注文して置た。爲永の梅暦と。馬琴の八犬傳は。まだもつて來ぬか。ナニ。昨日澤山持つて來た稗史がある。ドレ〳〵。ム、。コレハ。砂場の豐國伊へ。注文して置た。京傳の粹菩提に。種彦の田舍源氏だ。ア、。ハリ見ても感心かのゝ。粹菩提の。八大地獄と。田舍源氏の。烏瓜の所だ。ホカし。翌日所へ往て。筆探所は西鄕隆盛の娘が。城山ゑ隱遁して。神童に遭ふ所たのら。丁度。伏姫が。富山の奥て。神童に遭遇所が。入用の所だ。まだ其外に。鹽町の山本



から。小冊と。浮璃理本が。澤山來てある。ファン。夫い大方。三馬の浮世風呂と。鯉丈の八笑人と。近松。三好の院本であらう。夫も一編讀んで置ねば。追々讀物と。猾稽物が。流行るから。何時。入用が。出來るかも知れぬテ。ナニ。御堂筋の。和田君へ依頼で置た。八文字屋もんが。明日頃屆く〳〵。ヨシ〳〵。これも世話ものを筆採種になるから。堅氣ものだけ。買ふて置く氣ダ。ナニ。さう稗史斗り買ふて。妾しいものや。子供物を。買ふて呉れへではおまる。ナンノ子のものを。買ふるが有。故人の糟粕を。ゐめてさへ居をば。筆て。お飯が。喰へているのダ

○行過た閑化人

嘆一嘆。佳人才子に遇そとは。よくいつたるだ。造物主の。惡戯

ゐ知らないが僕ゐんぞを。開化日尚淺き。我日本へ産附るとは。實に慨歎ダ。天晴我輩なんどを。文明開化の亞米利加ゐ。佛蘭西へ産て見たれば。今頃は。撰擧されて。大臣領の。位に昇つて居るのに。惜しい者ダ。いつう歐米へ。轉藉をしようか。知らんテ。イヤ〳〵。一概にさうもいへない。文明々々と。地球上に誇る。歐米の各國も。稍ともすれば。戰爭沙汰サ。其戰爭ガ。所謂腕力で。決して文

明。沙汰でないて。百卷の万國公法も。一門の大砲に如ぎで。これも强弱を制する規則で。家國が。強國に向つてい。万國公法も。實地に行われぎ。嘆一嘆。これでい。歐米各國も頼々少おいるだ。歐米各國が。腕力の野蠻を。脫せぎとそれぎ。該地球上ゑい。頼みゑる國で。僕か意に適する國と。一ケ國もない。嘆一嘆。此以上は。輕氣球に乘じて。月球に入て。月國發見の闇竜とも謂つべき。豪傑とおるよりは。道がおい。併しれも。月球旅行の續扁が。出板おらおいから。內國の摸樣が知れないが。無暗に乘りたして。行譯にはいかない。一番思ひ切つて。太陽へ往かうか。イヤ〳〵。大陽近くへ往つたら。輕氣球の水索瓦斯が。膀朧して。破烈とるから、往けるおい。又土人が好過ても。個の變名でまさかの時に。間に合ぬも。知れぬぞ。やはり此町の。浦見重兵衛にしよう。かイヤ〳〵あいはいいゝや。己が南地で。思ひに思ふた。小美毛を横取して。已に鼻明した。怨がある故。他が投標しても。邪广せ紿ぞ。ならぬ。そうして。見ると。此近邊で。智惠と。財産と。家柄と。人物と。四德兼備の。人物と來〻日にや。マア。巳の外。人物いあるまい。ゑかし我投標を。我れが入る譯ゑ。行ねば。一番新發明に。多分附と。入れて置て。若巳の投標と。外の投標と。同數であはたら。仕方があけれど。己の投標が。九枚で。外の投標が。八枚の時には。向ふを倒して。巳の味方する樣にして置のがよかろう。ナニ。外へも行かねばおらぬから。早く去て呉れ。エ、。やかまし。いさうせそしおくいふと。ッイ狼狽て。當然の。撰擧するわい

〇新聞屋の種とり

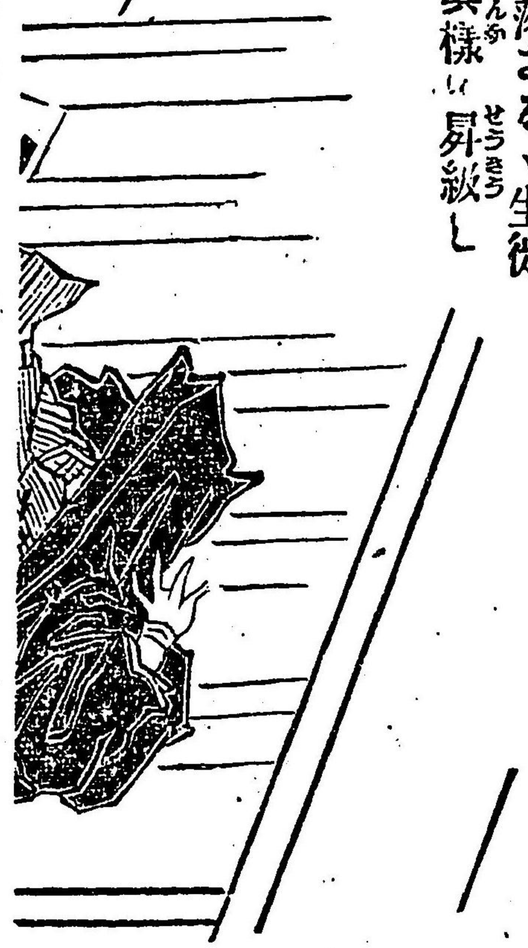
ナニ、今日は種が、あるか、といかりあから、兎驚探治郎、諸官省へ往ても、花街へ往ても、何々社でござるの、何々新聞でござると、名刺を出したり、名前をいふ者と、ちつと、やつと、譯が違つて、浪花新聞、創業以來、新聞屋の種とりと、人よ知られて、大阪府の受附が、何人替つて、裁判の口詰が、何といふ名で、警察署長が、何縣のお人で、憲兵屯所が、府下に何ケ所、鎮臺が、何隊、裁判が、何名、學校が何校

で、教員が何名、役場が、何ケ所で、戸長が何人といふから、日に造幣局で、鑄造金銀貨が何百万程ある、夜ゑ各花街ですゝむ客が、何名程ある、角の芝居ゝ何の、外題ダ、中の芝居ゝ、何日が初日ダ、戎座ゝ後、何と据ゑた、朝日座ゝ、又何の新藝ダ、藝者ゝさらへゝ、新町が惣督で菊江おひろが舞の惣贊ダ、南と北とが情事の惣督で、堀江と中とが、野暮の惣督といふまで、とゝかりあから、知り抜いた探

訪者をとらへて、種があるかないかとい、お怨み千萬、續物でも、一口煙でも、議論者でも、猾稽物でも、御好次第後へ〻引ぬと、一人りせり〳〵多舌〻いる間ゐ、いつの間か、編輯課が、引けてしまつた

○試驗ゑ落さる、生徒

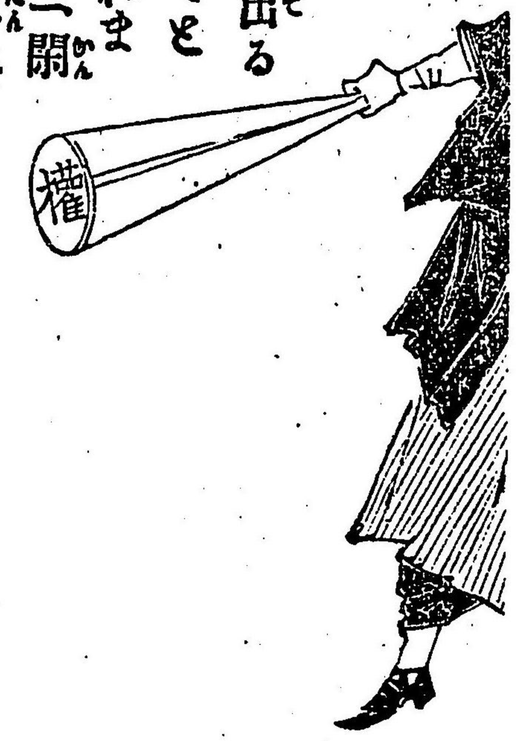
單五郎儀、何も其樣に昇級した迚、威張ないでもよろしい、教師も僕が、勉强しない割にい、よく出來る



と、譽て居かい、卒業した迚、せない迚、何構うもんゐ、作文でも、余程エ、積りだ、フケ取い、木にて造り、毛を植て、頭に當て、下なる板と、足にて踏ハ、旋轉て、散髮乃、フケを取る、機械ゐして、錢を取らざる者ゐり、と云ふ、錢を取ざる者ゐり、と云ふ處、上出來と、譽らる、筈ダ乃に、夫レ算術、も筆算乃數字を、二乃字乃、2と書く乃を、九乃字乃、9と書間違りた、計りでの乃字い放れ無乃を、教師が呵るこゐら、此間質屋乃、

億之助さんのら聞さアノ教師が、汚れ袴を持て行て、二十五錢お金子を借に來て、番頭さんが、二十錢より貸せないと云た爲、掌を合して、頼んで、五錢乃代りに麥藁帽を、明日乃朝迄と云ふて預けた儘で、取りに往ぬ事を、言てやろうの知らぬと、思ふたが止にした、算術や作文にも、間違ても、ブラコ、に掛てい、私　續く者い、

一人も無い、内乃慈父い、此度四級に、及第しさ為、二ツ、折にある石磐と、鉛筆乃軸乃先を捻ると先が出る乃を買ひて遣ると、言つてとけれど、之でい買つてくれまい、買つてくれないなら、一閑張の、カバン買つて貰ふ、單五郎様の、家君いどふだか、知らぬが、私の處の慈父い、舊弊の手習屋で、教へて貰つたつだから、國盡を讀ますと、羽前羽後だの磐城岩代だのハ、よう讀いしおい、北海道あんぞい、石狩北見、日高根室、千島の外い、丸さり讀ないで、商賣往來ざの、何ざの



と、知らない、事斗り言つているのだ、其癖水書双紙、買つてくれと云つたら、あんな物と、贅だと言つて、石筆を、日に二本も折るの、上草履を、月に三度も紛失のと、小言斗り言つて、買つてくれやしないで、勉強せい、〳〵と言つてる、仮令勉強して、優等の賞與を、貰つても、書物か筆か、半紙か、そんな物くれないで、豌豆のシヤツポ燒でもくれ、ばよいのに

○民權を振まはゞ人

コウ僕を誰だと思ふ封建時代の平民と違つて。明治の今日で生ずるや。必らずされに。賦するに。民權を以てせざるべなしといふ。民權家　總督板垣退助君の。黨員に加はり。彼スペーサ氏のいつた萬人同等民權ありとの。信仰が宿に永久なるのみ

あらず。日に月に益〻其地歩を固うするを發見せゞ。之を以て吾道義性格の緊要なる成分なりと斷言するも決して非理なりといやべからずといふ一言を重んじ。彼の佛國人ルーソー氏。のいつた民權。天の我にあたつて以て。自立を得せしむる所なりといふ一語を忘れず同國人ドマザト氏のいつた。民權の。制度あるものゝ決して近代の發明するものに出るに非ずして。所謂民權あるもの、。人類を惠し。人心を勵ませしや。其由來ゝ尚要するに國家制度の歴史ゝ。即　各其要需に適し其欲する所に應じ且正義に合へる所の制度と。作興せんとして。相繼で生々する。人間の活歴史あるに外ならずといふ。金言を尊み。彼英國人ウエブストル氏のいつた民權を保全するゝ民權を愛慕そる民人の。第一目的なり何に依て之を保全そ他なし。唯憲法

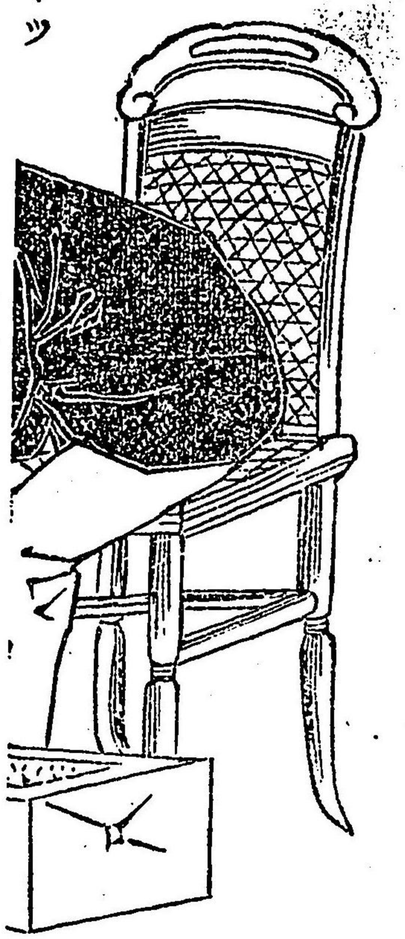
の制禁を固守し。政柄掌を。正ふするに依るのみといふ。確言を採るのだ。ナニ。民權家に。品行の正しきものゝ一人もない。麁暴の極點。不品行の行詰りダとナーン打遣つて置キヤアがれまれも。民權家の自至自由ダ

○管巻く人

ナニ醉て居る一升や二升の酒ゝ醉つて。おたまりおばしがあるものかい。今日の祝義を棟梁の酒松が五錢ピン往て二十錢を。十五錢といやァがつたがお氣に入らず。煙艸か多いの休息が多の。早仕舞か多いのと口實いつても受取の仕事と平の仕事と。大工ゝ粒々仕あげを御覽うしろの地口にあるのだ。

夫でなくつてもア、毎日〳〵且那に見張てたおるものかい。夫ゝ下女ゞ氣ゝ附ねへ這出の所へ嗅ゝ冗山の氣ゝしと來て居て娘や。男衆がゝよろ附といふ。三柏子痛たつ氣障な家ダア。イヤ。氣障といや。此手拭ゝ何んだ豆ゝ滝といふ言艸ゝ幾等も聞たゞ天窓ゝ洩る手拭ゝこれがはじめだ。全体何所で誂やゞつたか去らないが一反で十二もとらて。さまるものかい。おたあつらへら家も。おつらへられゝ家ダア。自分の家が大事ゞと思やァ染地の吟味位ゝ去なければおらぬに。只安く賣るばかりが商賣

だと思つて唐紙ばかりの安物を蹴倒し。下手な浮るり語ゞヲへが糊地ばかりで胡麻化して居るから終にハ自分の家名も出るのだ同じ手拭一つ呉れても大寶寺町心齋橋東へ入關西英學校の呉れた手拭ハ地からして違つて賭博師の己等くハ延喜のイ、腰手拭とハ。離有譯ダテ。ナニ其手拭ハ。八幡節心齋橋南へ入丹平の家で別染に染た手拭ダと。ヘン其樣な聞かなくても。百も御承知二百も合点三百が。代がで四百が。病ゞ五百が。羅漢で。六百が。エーコーツ



ム、。さけーとさかナーハ六百ダーシャアキー、ーマーマか。ハ、、、、

○西藉の飜譯

大淵駿々

是ハ〳〵。堂君。先これへ〳〵。定めて今日御來臨と。例のだイヤモンド。校正の御催促と。スペルと。第二リードル。乃御督促でござらう。ナニ。どうもセン〳〵たらりにと困る。イヤ決して等閑にハいたさぬ。免角當今ハ。英學流行。で實に飜譯家

ハ。餘暇がでざらぬ。ハ、、、。夫に本町の國分社から。シルの經濟書を。備後町の吉岡から。マッケー氏の。地理書の。急譯が。來やーだので。ツイ寄家のが。延引をやした。ナニ。シルの經濟書とも。開なれぬ書藉ダ。是ハ決しからぬ。シル氏ハ。經濟學の。大博士でござるて。ナニ。夫ハミル氏の間違でおいの。オ、オ、成程。おれハ迂生が。誤解でござつた。ツイ。シと。ミの。假名が。能く似に居やそで。放心。シル氏と。讀んで居やした。ナニ原書で見れば。shi と mi と 文字ハ。ナ變の違だ。成程。原書で見れば。違つて居やそが其質。シル。否。ミル氏の。經濟書の如きハ。既に福澤が。飜譯をやして。東京に。澤山出版有やそから。夫を其儘。寫しやすのサ。ナニ。夫でハ新に譯すのでとない。寫して居るのだと。マア〳〵さういへば。そんなものだて。ナニ。夫

でハ校正も便りない原書を持つて歸る。おきはけしからぬ。寄家のものハ。等閑にいたさぬ。ナニ。夫でも其手並でハ心もとない。やつとり河津氏か。早見氏に。依頼する。夫ならば寄家の手を經るに及ハぬ。其實迂生の力に及ばぬ。既に早見氏へ。依頼をやしたテ。ハ、、、、

○猫の化たる權妻

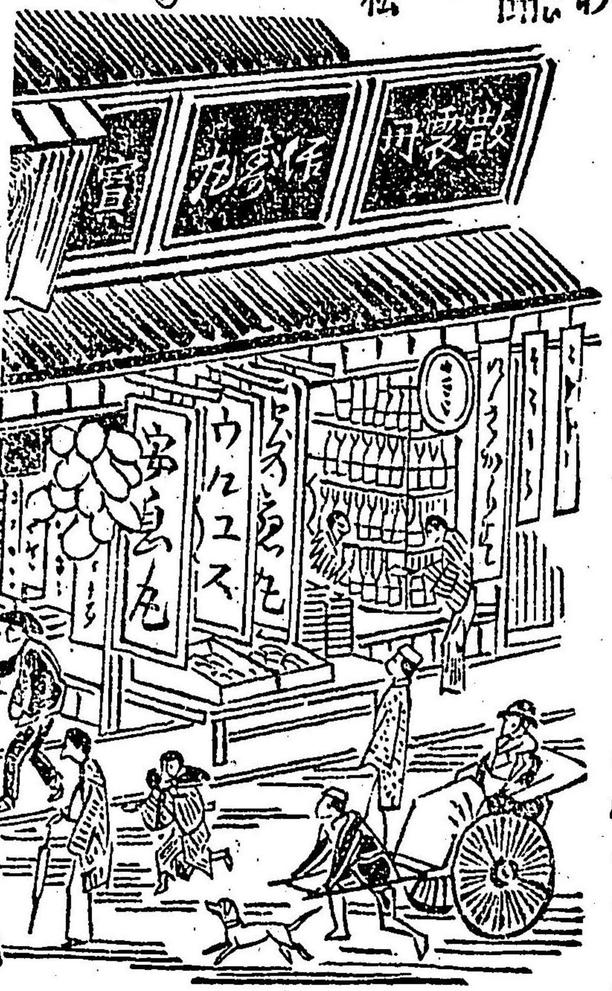
アノコレ、お春どん。昨夕から。聞う〳〵と。思つて居たが。旦那がお出だから。言へかつたが、一昨日妾がお湯へ這入て居たら。おまへが。何だか。嬉しさうな聲で。キヤツ〳〵と。旦那の前て。笑つて居たが。アレヤ。何だつたへ。ナニ。旦那が戯言を。仰つたのらダ。チヤ〳〵さう。で有うと。思たんだよ。旦那は多姪であらつしやるから。油斷が出來ないヨ。夫よお前も。何だか。此頃ヘタ〳〵するのハ。定て妾も、婆アになつたから。若ひおまへよ。旦那も思召。ありと見へてぞうとかして。お前が。權妻にあつて。妾を放逐心組だろう。イヤ〳〵。さうでゐいとハ。言ハさないよ。併夫と及ばぬるサ。妾が余所外の。權妻とハ違つて。旦那が若旦那て。入らつしやる時分に。度々の。散財多額で。親だんあの。お首尾の惡く。亦しても。御親類へ。預けられ遊はしてこさる中の。言ふよいわれない。艱難をして其思ひか通じて此樣身分に。なつたのだから憚りあから。旦那

さへ妾には。遠慮してござる位。夫故。御店の御支配人もっ妾にハ。手を措てお出だ。畢竟此樣お。御大家で無けりヤ。妾ハ奥樣サ。又おまへ方の心でハ。何ぞ猫の古手の癖と。お思ひだろうが。如何にも妾ハ。藝妓もゑました。藝妓ハゑましたが。腹からの。藝妓じやありませんよ。妾も十六七の時分までと。婢ハ五六人も。使つた家の。お嬢さんで。常振袖に。一寸出るにも。指掛日傘サ。其お嬢さんが。藝妓になつた。が不思議だと。お思ひざろうが。これは慈父さんが。貸蒲團。損料の滞りで。裁判ゑおつて。身代限りを。なさる時に。慰旁藝妓になつたのサ。何が可笑てお笑ひた。成程。こをハ私の云やうが。悪い。蒲團を借りたのでない。貸て倒された。爲に。

身代限りをしたのざョー

○櫂妻を飲でかハつて居る下婢何だ。面白もおい多姪が。婢姤には恐るよ。畢竟。旦那の御威光て。雇主々々と。いつて居りや。イヽ氣になつて。主人顔が。面が憎ひよ。おれも餘り旦那が。好人で入らしやるからサ。適々お交際て。南地へ登樓ゑなると。其晩ハ癪を。起したり大騒動サ。これとはふも。根が多姪うち。原因ハ惰氣からサ。旦那のお譴中にハ。艱難をした。何を艱難をするものか。他で聞たら。外所へ賣ない。藝妓ゑりたから。旦那のお仕向かおくバ。困る筈サ。私ゑう婢奉公に來て居るから。あんな。古猫股。に手を突て。お上でハの。お美毛さんでハのと。いつてやるのサ。宿へ下りヤ。今ゑそ百性して居るが。舊ハ士族サ。藝妓の古手なんぞに。使用れ

て。おたまりこぼしが有ものか。問ふに落ぞわ。語るに落ると。損料蒲團で。身代限りするやうな人の娘が。十六七になつて。振袖着るものが。有ものか芝居じやあるまいし。恍惚切てござる且那から。わんおはらを。聞てござるかも知らないが。私おんぞにいふのは贅言ダ。オヤ〳〵。亦おんだか。呼んて居る使用なけ

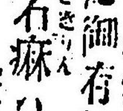


にや。損の樣ニ

○賣藥の功能をおらべる人

凡日本廣しといへども我製藥。痳病。消渴藥。鷄卵散の如き特効のある。賣藥い外に類なし。如何程長さ痳病たりとも。一日一劑で。治する。請合の妙藥若。看客の中ヨ。同病の方があらバ。お求あるべし。本家い大阪島の内えかも〳〵心齊橋の通り筋にて八幡そじを南

に入る北らいへゞ左側の中央。南からいへゞ右側の中央。屋根看板にハ鶏の畫を置コ家の商標ゝ商



此目印さへお忘れかけれゞ盲目と赤子の外の御人ハ直ぐに目に附く立派の藥店藥の利目ハ。今更いとぞも。三府。四十と二縣の新紙に種々其効能を記載せしばかりか甚しきハ。米國のメールに其効能を記されたれともいまだ御存知あき方もあらんと。概略藥の効能を記さゞ腦痳。血痳。石痳ハ元より御婦人方でハ消渇ゝ用ひて若効能いあらざる時にハ代償を其儘返却いたすが則。保証の妙藥といふべし尚委しきハ別紙に添へたる。能書によつて。お察しあるべし又次なるハ同家の妙藥赤穂の忠臣。大石良雄氏か遺劑の妙藥。切疵。種物一切の。膏藥本名忠臣膏一名。赤膏藥といふ。巴乃目印。是ハいづれも。既に御存じ

義士四十七士の惣督と呼れし。赤穂乃家老大石良雄氏が敵吉良氏の舘に討入四十七士の手疵を。治すため自ら製せし赤膏藥ゝて彼忠臣藏七段目茶屋場の文句に。一間づゝきさげても。赤膏藥も入らぬ。年齢とありしハ。作者竹田出雲が此忠臣膏を稱せし。一節といふべし

〇螺を吹く人。一名大炮放す人

コレハ〳〵。文助さん。大きゑ御無沙汰。いたしました。一應伺ひます筈。何かと繁務で。此間から或書房の。日限仕事の。式亭が浮世床。袖珍本乃校合やら。膝栗毛を。漢文に引直すとで。實い他の人に面會も斷ると。いふ程でゲス。其所へ亟て。迂生に。曲亭馬琴乃號を襲ふ樣と。同氏外孫の。肉緑のある。橋塘子が。進めらるゝ乃で。諾さんすと思ッて見まーさゲ。馬琴何人なる。我何人あるといふ。早見で古人の虚名を。相續するい。迂生乃甘んせざる所と。謝絶して。一寸慰みゑ。淨るり乃作として見樣と。思つている折柄。植村氏が。訪れやしたで。談夫お移りやしたらッ植村氏も。先年作されやしたさうだが。時代。御家。世話よりい。王代がよかろうとろるで。今度眉輪王が。安康天皇を弑し奉る。一段と。稿して見せやしたら。植村氏舌を卷て感し入られ。此位乃。腕ならべ。劇場の。新狂言に。両立て。新淨るりを。續々出して貰ひたひ。附てい。近松門左衛門と。作名を稱していい。如何と。大きなるになって。鬬にも大骨折サ。漸々三ケ年。延期といふるで。暫時中止サ。そんおさんなで。大混雜。夫故。購求ました。艶道通鑑に。傾城禁短氣。太田先生の一話一言。との代價も。よう差出しゑせなんダ。本日い。新潟新聞より。豫て送り置やした。今西越後風音といふ。續物の原稿料が。二十五圓。爲替が届きやしたから。只今妻に受

取にやりやりした。皈り次第お屆けやます。ナニ。待て居る。イヤ。夫でハ恐れ入ます。併し殊によると。郵便局こゝら尊宅へ。まとりましたも知れやせんテハ、、、、、

○能くおろぶ猫子

市どんか。明ーだよ。着替入れてお呉紙もたたおもないから。一所だよ。そして。今の方から。便りがありたら。直ぐ耳に。入れてお呉ゝ。ついでに。此手紙。右の方へ。持つて往て。遇くとも。のさ〳〵行と。斷つて置んれよ。ナニ。おチョボどんが。手紙を持つて來たと。おまつたチエ。入方例の口だらふが。今夜ハおつちに。大鯰筋が。ゐゝつて居るんだから。何とか程よく。斷つてお呉だとイゝに。ナニ。例の口ざチエ。内証乃口ざと。夫おらいつもの。他所行とか。お嘘アの病氣とういつて胡磨化してお〳〵さだとイゝに。ナニ。其外にまざ。銀行の口が。か〳〵つて居ると。ナヤ〳〵。さう一時でハ。實におまるチエ。今日が土曜。ゆしたが日曜。あさつてが。神武祭の大ドンタクと來た。日にやどふせ。ひげ筋の惣出だろうに迚もおれでハ。おとり死れまい。夫に眉毛おしの。好ヤンの方にも。此頃外乃女子が。出來て居ると。噂がある故。これへも一寸顔だしがえたし。アゝ。こう轉ぶ所

が。多くつて。とてもからだばかりで。まとりきれない。エ、
ま〜よ。後に立ち先を。轉ばしておけ

○ゑらばる人

コウ汝、眼が無か、他の足を踏ふとシヤアガル、已を誰だと思
ふんだ、會津の小鉄の、親類分で、大阪で名高い、根津四郎右衛
門の、六十四代の、後胤、長隠院、半兵衛とい、己いるが、汝チコ
癡にされて、あまるものか、大閣樣ハ、金
龍綱張の名城の、天主臺を、横眼に自眼
で、澱河の水を、產湯ヨ浴て
生れた兄さんが、其証據にハ
新門の辰五郎が、大阪に居た
時分にハ、一日の中に一度と

二度ハ、達者
で居るとか
無事だとう、
いつて、來あ
い日ハ、おう
つの位ダ、小
金井の、小次郎にハ、懇意に
とならあいのに、故意々々手
紙で、兄弟分に、あつてくれ
いといつて、來る位ダ、客年
の春も、千日前觀物小家乃、
大象が、飛だした時に、已が一ト白

眼したら、ジリ〳〵と、後巡しのそが、論より証據だ、何故土へ手を突て、謝罪あいのが、誰ざと思ふ、この鼻ッたらし野良めが、エ、忌ましい、人に名辨らして、いつの間にか、逃て去まつた

○女房にまゐれて居る人

時にお梅ざうしのそものであらう、堀江の姉貴が相談に來た、伯母貴乃一件、來年い六十一ゑゐるから、ロシ、生て居た所で徴兵退れの口をさがしても、米代や家賃位い

工風い附ぬでもおけれど差當り、今暫乃所が困るといふて來た、今夜の一件、ナニ、あんた乃身内いあんさがどうなと、かつてにしなされ、サア〳〵さうお前の樣に天窓から怒つてかゝつてい、ものがいとれぬ、其所が膝とも談考とやらにて、行ねバ、行ぬと、いふてさへ、呉れたら、私しも、其氣で思案を仕替て、母者人をお前の言ふ通り隱居さした、位の、私しの、心で、ナニモ、無理に伯母貴の、世話せうとていとねど姉貴も、折角相談に來た故夫で、お前わ問ふて、見たのだ、ナニ、堀江の、姉貴が來る善なるいとぬから、氣ゑ喰とぬといふのか、夫もお前が、さういふるなら此後一切、來ぬ樣にいひ附親節と一所に、往來をせぬるに、極めてさへ置けバといと、いふもの、ナニ、夫でも、私しの兄弟や、身内の者い相變らず、交際て、呉れねバ、義理が濟ぬ

と、ムン〳〵、よし〳〵、夫もお前がさういふるなら、コシ、私の身内い、交際せずとも、お前の身内を、捨て置ぬて、ナニ夫に一人の甥が銀行を、免印、戻つて難義て居る故、夫も引取て、世話して呉れといふのかムヤ、

よし〳〵夫もお前がさういふるから、朝日社の、中村さんふ、たのんで、配者にでもさせるの、若不都合なら探訪にでもさすのさ、ナニ、新聞屋や山版屋い人が悪ひから望まぬによつて、居職商人の店商賣が望といふのふ、ムン〳〵よし〳〵夫なら丁度よい所がある心齋橋筋八幡筋南へ入森平兵衛さんといふ、大阪第一の、足袋商のい店へ、世話して、貰ふて番頭さんの、嘉助さんと、いふにお願ひやと、夫いまる、心切なお方だ、ナニ、夫なら、夫い、夫として、私しの外にい、一切浮氣をせぬと、極て置けといふのの、ムン〳〵、よし〳〵、夫もお前がさういふるなら、万るお前にまかれて、いるのさ

○人を撰ぶ人

ナニ町内の小使ゲ來て、府會議員の、撰擧して呉れとか、ムヽ、〳〵、ヨシ〳〵、一寸待して、おけ、アヽ、コヂッ、誰にしたものだろう、横町の舊戸長に仕ようか、イヤ〳〵さういならぬ、アノ人物い、口も利口ゐ、才もある男だが、何でも、勤役中、地券偽造云々で、評判が、惡かつたようて、東町の、山中小四郎に仕ようか、イヤ〳〵、アノ、男智惠と、口先と、味ゆ樣ざゲ、俗に所謂名詮自性で免角山師の弊が去れねバいつそ、裏町の内田喜瀬氏と極樣、この人なら、町内

でのお人よし故、滅多ゑ飛相なるゐわるおい、ゑがし、余りダヽナニ、私しのゐまり、あおたが、早く碁を初囲なさらないと、相人のお客さんが、お待久ダと、ナーニ、此樣客位い高で知れた町内の、へ、、、戸長さんだつた

○婦人に腹を見抜れて居る人

己ゲ。去ぬ〳〵と言ふのい。小斑が。他所行して。姿が見えおい依つてと。いふ譯でいない。今晩も かなければならぬ。用ゐを

忘れて居た故ダ。ナニ是から新地へ。行のざろうとい大相違人〳〵。何の小白なんぞよ。逢ひ戻りする者の。夫でも此間。彦六座へ一緒よ往たと。いふのか。ナアニ。あれい外の棧敷へ。來て いて挨拶に來た斗りサ。何のアメナ下手俳優に。野分て居るやうな。畜生ゐ未練があるものか。ナニ蟹島へ。町小使を遣つたから。待てといふのか。さういそれて去ぬのを止ゐと。小班が來ゐいから。去ぬといふ樣よ見ゐるが。汝の顏を潰しても。濟まゐいから 應吉と。小來を聘して飲直さう。ナニ應吉と。小來い。子刻さへ買へバ。直に示談が。出來るからといふのゐ。決して〳〵。其樣譯でいないが。寒氣見舞を。貰つた儘で有るからサ。翌日朝日座へ行ふとか。イヤ〳〵已い。アノ狂言が至つて嫌だ。ナニ陰をいふものか。何い小白の情夫の。市川大幸が居るから見な

いといふ。嫉妬でいあい。仝じ行くなら戎座へ行くから。藝裏でない方の。棧敷で三と四と。取つてくれ夫も翌でないと日があいから。ナニ。入入で取れぬのい。知つていふのか

○自由黨組立る人隊長の板垣君が解黨以來尋て大隅君が。解黨と來たので。自由黨の勢力い地に落て殆も燈の消た。同樣と

いふさへ遺憾だと思ふに大阪の立憲政黨新聞ハ日報と改め京都ハ自由の魁ハ。京都と變じて只頼とする所ハ。東京の自由の燈夫さへ風乃前の燈同樣と。思ふ下から。今日の朝日新聞の雜報を讀で驚いたのハ。今度ハ。一件何ハ仔細か何の譯か知らねど。舊自由黨の屈指と呼るゝ。大井憲太郎又。小林楠雄に。寺島政郎に。山内一正に。中谷某抔が拘引されたハ。何でも。不穩の企てがあるとの。尤道路の。風説のる故。何の故とも。何とも知ら絲ど。斯く自由黨の黨員。が拘引されてハ自ら勢力も。衰へるといふのだ。夫にまだ〳〵。驚いた一件ハ。今日の電信。東京の馬場辰猪に大石正己も。拘引なさたと。我黨の許へ達したを思へバ。愈々自由黨の。勢力ハ。地に落しといふのだ。折角無智無氣力の。愚民を論して。自由黨といふ大塔を組んと。企た。目論見が變じて。中途で碎けんハ。遺憾ハ譯だか。若其筋の。嫌疑を蒙むり俱に拘引とあつてハ。大變淵に望んで。魚を得ん。退て網を結ふに如ずの。該もあるから。鄉里岡山へ歸ると仕樣か。ナニ。岡山でも一二十九名拘引あつたと。サア〳〵。大變夫でハ。古鄉へ。歸るも出來まい。イッッ。高知か。長崎へ行くべし。ナニ高知でも。長崎でも。拘引あつたと。ホイ。コイッハ。釼呑。さうあちこちで。拘引なつてハ。何んだか。足元がおそばく思つて。心の内がヒヤ〳〵といふのだ

○百妖笑々寄加伴終

明治十八年十二月五日出版御屆
仝　年仝月廿六日刻成
（定價金五拾錢）

大阪府平民　中村善平
南區心齊橋筋二丁目十三番地
編輯兼畫者
仝　森平兵衛
南區心齊橋筋二丁目十三番地
出版人

「イヨー何だく。變的な廣告が出て居せ口が演説仕て居ると耳が傍聽して蚯蚓のやうな字を書て居るやうだが全体是ハ何の廣告ダナ大講義宮崎玉緒先生の和歌に博覽會長天野香雪先生の題字ゑ傍聽筆記學會長源綱紀先生の序文で言語の

寫眞法一名筆記學楷梯

かツン〳〵ナール是から開ける此頃諸新聞紙で噂して居る東京日本傍聽筆記學の本會から人撰せられて此大坂へ此頃支會を開きに來た丸山平次郎氏が編輯乃筆記學*獨稽古といふやつだおナールこいつい調法なものが出來た何でも是迄東京の男から聞くに口でいふ事と耳に聞へる事い其場で書取れるが筆

記學の法ださうなら演説の傍聽いふも更なり議事の傍聽から公判の傍聽淨るり端歌都々逸新内何でも歟でも聞にまかして其場で書取つて來るいこいつに限るて。去かし定價い幾等だ。ハヽン定價い五十錢が今日より向ふ三十日間い豫約並として三十錢とハ賣出しろ時ろ規則でわつたす追々世の中ゑ僞物がある から續編豫約の人に限り無代價で與ると。ナールナヨ。巡査官員書記々者い元より各藝人達にい缺べからざる必用の書にして既に東京に有名なる三遊亭圓朝が演せし牡丹籠燈も此筆記法によつて書取しものなれば是非前編と續編を求めて言語の寫眞をこゝろみたまへと爾いふかゝし賣捌い何處ゞナヨ

大阪心齊橋八幡筋南へ入東側　賣捌所　森玉林堂

何さまだ何か書てあるせ府外郵税が金十二錢

商標　御召たび　ばつち股引　鶏卵散忠臣膏　そめ手拭

響賣處　本家　森平兵衛

足袋ばつちの効用人ろ身体直接ゑ寒暑温冷を受けるい人間第一の不養生でありますとい衛生家も毎度おくおしありまし朝日新聞投書ゐも洋服ゐ改正せんより足袋ばつちを用ひよ云々とあり豫防せゞんばあるべからゞその要品也●丹平の足袋効用我丹平足袋ハ專ら各農商工家に古ゑ用ひ來るろ至極ゐ爲方よき無比の品にて幾度水ゐ入らるゝとも破るゝやうゐ安たびゑあらざるい歩存じの方ゑ聞てください●坐敷足袋の効用ざしきたびい專ら諸官省諸會社諸新聞各銀行歌舞妓を始神官僧侶ハ云も更なり藝娼妓町方に至るまでお坐敷人おるのとれのせ

既に用ふる地うすのさ丸はな格好のよさ品よして我先祖森玄六氏自ら能狂言に用ひ經驗せられたる無比の品よて是又お求めのうへその宜しきを評し玉へ

官許 **鷄卵散** ほんびやうせうかちの妙藥　主治　ほん病ゑ五種の變りあり て氣癇○石癇○血癇○膿癇○勞癇○又婦人せうかちともみな素いひえ去りの絲法の滯りより發する所よして他藥よて一且治すといへども病根をさゝされバまたも再發するの患あり予家ゑ製ゑ鷄卵散いとつばりぼんとなをしさるゑうけあいます良藥ゑれバくわしき能書を見て法もと究あらんことを

官許 **忠臣膏** 大石良雄氏遺方　この膏藥い忠臣藏七ッ目茶屋場のせりふよ赤かうきぢぐすり

やくもいらぬとしばいを見るその赤かうやくを今改めて忠臣膏と號くるゑしきい本能書よ記ゑ　大阪心齋橋筋二丁目　丹平

英學自宅獨習會誌　毎月三回發兌

定約改正内地雜居ノ擧已デニ迫マリタル今日ニ於テ英語ノ必要ナルハ固ニ吾輩ノ喋々ヲ待タズ然ルト雖モ英語ノ學タル至難ノ業ニメ英國人ト雖モ語學家ニ非ラザルヨリハ專ラ通曉シ得ベカラズモノトス我英學自宅獨習會々長清水桃谷翁會テ文部英語學校御雇教師英人テイボア及ビイートン氏ノ依囑ヲ受其ノ子女達ニ英音法英文組織法等ヲ教授セシ事アリ夫レ英邦

人スラ尚ホ斯ノ如シ況ンヤ本邦人ニ對シ我仮名ヲ以テ之ガ教ヲ下サントス復々至難ノ難タルモノ然ルヲ世ノ青年輩皆ニ大家先生洋人某著或ハ閲云等ノ標題ニノ眩惑サレ知ラズ識ラズ誤謬ヲ習フ如キアラバ先入師トナルノ諺ニテ遂ニ改良スル能ハザルベシ而テ其ノ癖タル徒ニ彼ガ嗤笑ヲ受クルノミナラズ日常交際及ビ商業上ニ於テ大ヒナル損害ヲ受ルニ至ルベシ我ガ會大ヒニ感アリ由テ會誌ヲ編輯スルニ先ツ發音法ヲ圖解シ大小ノ仮名異狀ノ仮字ヲ以テ英音ヲ訓シ又タ箋注ヲ加ヘ意義ノ分明ヲ要シ及ビ會誌讀習者ノ質問ニ應シ傍ラ正則英學ノ校ヲ設置セリ有志諸君ハ左ノ本支會ノ取扱所ニ郵券二錢ヲ投ゼバ規則書ヲ呈スベシ

大阪心齋橋大寶寺町東ヘ入卅九番地

英學自宅獨習會本會

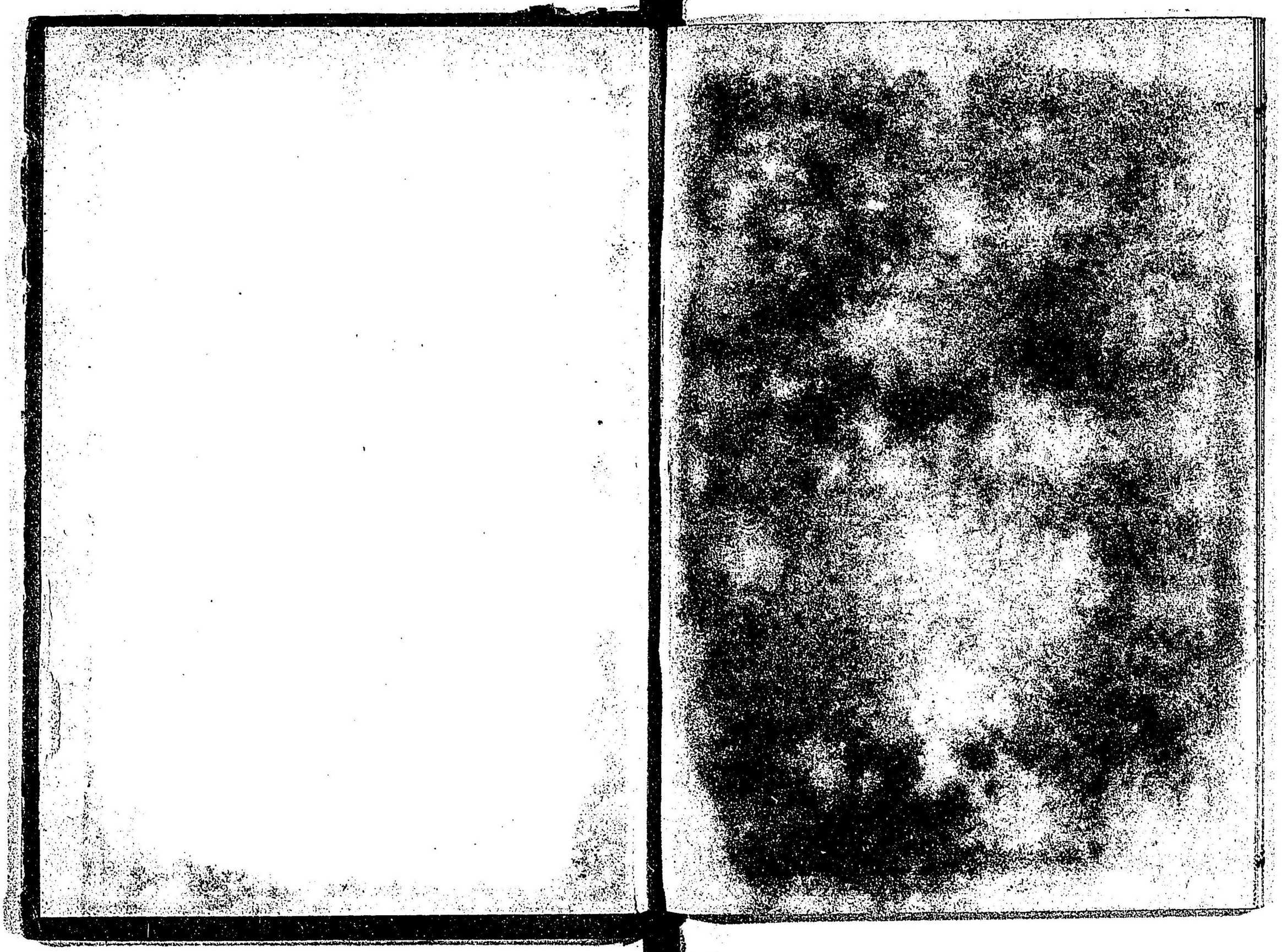
西京上京區第五組小川寺ノ内下ル射場町十四番地

同　西京支會

泉州堺區大道筋大小路東ヘ入ル

同　泉州支會

河内國丹北郡三宅町

同　河内取扱所

大和國郡山堺町
同　大和取扱所
大坂東區平野町二丁目拾壹番地自由堂
英學自宅
獨習會誌
活版印刷局